

平成 28 年 6 月 23 日現在

機関番号：13801

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24530862

研究課題名(和文) 早期解離性評定尺度 児童養護の日常場面で使える病的解離性予防のためのツール開発

研究課題名(英文) Development of an early dissociative features checklist to estimate later dissociative problems for preventive intervention in the context of protective care of children.

研究代表者

田辺 肇 (TANABE, Hajime)

静岡大学・人文社会科学部・教授

研究者番号：60302361

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：児童養護の現場で、後の解離性の問題の発達を予測する、早期解離性チェックリスト(情動調整不全、実行機能の不全、リフレクティブ機能(メンタライゼーション)の未発達、自律神経系の過覚醒(睡眠障害)などの行動特徴を示す27項目)を作成した。5つの施設の職員31名が、担当する児童の、現在の解離性の問題の深刻度および子ども版解離評価表日本語版、そしてレトロスペクティブに乳児期の状況についてチェックリストを用いて回答した結果から、虐待歴や発達の問題等をもつ他の子どもに比して、解離性の問題を持つ子どもは、乳幼児期に情動調整、実行機能、および一部のリフレクティブ機能の不全がみられる傾向のあることが示唆された。

研究成果の概要(英文)：Since there are difficulties managing dissociative problems in protective care of children, it will be quite helpful if you can tell what kind of features in early years are indicative of later dissociative problems for preventive intervention.

In this research, care workers and clinical psychologists working at five foster homes examined the CDC (Putnam et al., 1993), gave outline description of current dissociative or other difficulties with the children whom they are charge of, and retrospectively reviewed their preschool condition with a newly developed 27 items checklist on early dissociative features. The analysis suggested dysregulation, dysfunctional executive functioning, and a specific type of deficit of reflective functions/ mentalizations predict later problematic dissociation and high score of the CDC in this sample children, many of whom have developmental disabilities and history of childhood maltreatment.

研究分野：臨床心理学

キーワード：dissociation maltreatment dysregulation executive function reflective function ANS hyperarousal preventive intervention protective care

1. 研究開始当初の背景

研究代表者は、これまで、日本版解離性体験尺度、日本版思春期解離性体験尺度を作成してきた(田辺, 2007; 2009; 2010)。解離の尺害は、解離性障害のスクリーニングのみならず、多様な問題、特に外傷性の後遺障害のアセスメントで用いられており、重要な臨床査定ツールと位置づけられつつある。

一方子どもの解離については、10歳までは、遊びや対処・防衛メカニズムとして自然に解離を用い、そのことで、現実から逃避する、あるいは、想像する能力を持ち合わせていると報告されている(Lynda, 1996)。解離には正常な範囲と病理性の二側面がある。正常な解離行動は、年齢とともに減少していくが(Putnam, 1993)、対処・防衛としての解離が高水準で維持されることは、病的解離性の発達につながるものと考えられる(Lynda, 1996; Putnam, 1993)。

ストレスに直面して現実との接触を失いもうろう状態になることや、予想不可能な突然の発作的攻撃性と、そのことについての後の健忘など、虐待的養育環境から保護された子どもに多く見られる解離を中心としたトラウマ症状は、児童養護の現場における支援の大きな障害となっている。

学齢期、思春期、成人の病的解離性は、乳幼児期のD型アタッチメントなどによばれる、虐待を受けた子どもに多く見られるアタッチメントの問題によって予測されることが示されている(Lyons-Ruth, 2006)。虐待的養育環境によって形成された、アタッチメントに関連する問題を、早期に解決することが、後の病的解離性を予防することになると考えられる。

研究分担者は、児童養護施設の虐待を受けた幼児のアタッチメントに関連する問題行動とトラウマ症状を減少することをねらいとした、担当職員に対する安定したアタッチメントを促進するプログラムを開発し、それを実践してきた。その有効性として、子どものアタッチメントに関連する問題行動とトラウマ症状の減少、職員の養育スキルの向上が示唆されている(徳山ら, 2009; 2010)。

対象となった子どもには重篤な解離を含むトラウマ症状を示す者も見られ(徳山, 2009)、解離は、ここでも、トラウマとの強い相関が示されている(Deblinger, Mcleer, Atkins, Ralphe & Foa, 1989)。

病的解離性は養護的支援を困難なものに

し、適応的対処能力の発達を阻害する。アタッチメントの問題への早期介入により、病的解離性の発達を予防できれば、適応的対処能力の発達を促し、そのことがトラウマ症状の緩和にむけた肯定的プロセスを推進する力となると考えられる。アセスメントでは、病的解離性のリスクを反映する特徴を適切に選別する必要がある。

そこで、子どもの解離準備性について、早期に、病的解離性に結びつくリスクのあるものを見分けることができれば、後の病的解離の発達への予防的な介入を早期に実施できるものと考えた。

子どもの解離性の尺度には、子ども版解離評価表(Putnam, 1994; 日本語版: 富田ら訳)があり、多く用いられている。しかし、それは既に発達した病的解離性症状をアセスメントするものであり、本研究で焦点づける早期解離性(将来の病的解離性の発達を示唆する行動特徴)を評価するものではない。本研究では、予防的な介入のために用いるツールの開発を行った。

2. 研究の目的

(1)後の病的解離性の発達のリスクを反映する幼児期に見られる特徴を特定する。

(2)(1)の結果を承けて、早期解離性の行動評定尺度を作成する。

(3)(2)を児童養護施設のスタッフの日常的な関わりの中で捉えることが出来るか検討する。

(4)(2)を児童養護施設の子どもや里子を対象に実施し、アタッチメントの障害や虐待歴との関連を確認する。

将来の病的解離性の発達のプロスペクティブな予測性の確認は今後の課題とする。

3. 研究の方法

(1)フィールドインタビュー

目的: 早期解離性行動評定尺度のパイロット版の項目選出

対象: 児童養護施設の職員

手続: 比較的自由的な構造の半構造的インタビュー

焦点: 後に解離性の症状が顕著であった子どもに乳幼児期に見られた行動特性について、日常的な関わりの中で認められたものを中心に聞き取りを行った。

(2)予備的調査

目的: 早期解離性行動評定尺度の作成

対象: 児童養護施設職員

測度: 以下の3点に回答を求め、併せて面

接調査を行った。

早期解離性行動評定尺度のパイロット版（早期（乳幼児期）の状況を問う）

その尺度の評定容易性（日常の子どもとの交流・観察で判定手がかりが得られるか）
虐待歴・問題行動歴（特に、発達の問題や現在の解離性の問題の有無）

(3)本調査

目的：早期解離性行動評定尺度について、子どもの現在の解離性の問題の有無を予測することができるか検討を行う。

養護施設職員にとっての評定の容易性の確認を行う。

対象：5つの施設の児童養護施設職員（ケアワーカー、臨床心理士；31名）対象に調査を行った。

測度：以下について回答を求めた。

早期解離性行動評定尺度（乳幼児期の状況をレトロスペクティブに問う）

CDC（Child Dissociation Scale; Putnam, 1994）子ども版解離評価表日本語版（富田ら訳）（現在の解離性の問題について問う）

虐待歴・発達の問題・問題行動（特に、現在の解離性の問題の有無）

アタッチメント障害尺度（数井・遠藤, 2005）

評定尺度の評定容易性（面接を実施できた対象者から聴取した）

手続き：各職員が、担当する子どもについて、十分にプライバシーに配慮し匿名で回答した。

4. 研究成果

(1)解離性の問題を示す子どもに特徴的な行動特性について

以下のような特徴が挙げられた。

情動調整不全 (dysregulation): 向こう見ずな行動、感情に飲み込まれて止められなくなる、感情を沈めることができない、など

注意の切替え不全: 過度の没入、周囲の変化に注意が向かない、など

実行機能の不全: スケジュールが把握できない、状況の先読みができない、欲求の先送りができない、など

報酬機能の不全: 嬉しいことが次に繋がらない、楽しみなことが誘因にならない、など

リフレクティブ機能の不全: 身体的、心理的な苦痛などの自覚の欠如、自己および他者の気持ちを行動に取り入れてい

ない感じ、など

自律神経系の不全: 突然泣き出す、驚愕反応、睡眠障害、など

これらの特徴については、D型アタッチメントとされる特性との重なりもあり、今後更に概念の整理が必要であると思われる。

(2)早期解離性行動評定尺度について

本研究で用いた評定尺度は、現場職員の回答しやすさを勘案して、項目毎の3件リカート法（あてはまる、どちらともいえない、あてはまらない）を採った。しかし、背景にある機能的な不全が、どのような現れを示すかは、実際は子ども毎に異なっている。項目で例示している各行動特徴とその背景にある問題とのつながりを理解することのできた職員からは「子どもの状態を理解する上でとても参考になる」との肯定的な感想が得られた一方で、機械的に表面に現れた行動特徴の有無をチェックした場合は、項目の記述が具体的であるために却って狙いとする状態を捉え損なう可能性もうかがわれた。

このチェックリストを所謂スクリーニングとして用いることを想定すると、現状で十分な感度があるとは言いがたい。チェックリストを用いた対象児理解の職員研修とセットで活用するか、チェックリスト自体のスクリーニング用具としての機能を高めるか、何らかの工夫が必要だろう。

(3)本調査で検討対象となった子どもについて

検討対象となった子ども64名（平均年齢11歳、男児35、女児27、不明2）の、56%に発達上の問題があると報告され、未確証を含め、38%に身体的、20%に性的、31%に心理的虐待、62%にネグレクト、24%にDV目撃があると報告された。30%に何らかの解離性の問題が認められ、内8名は深刻な支援上の困難があると報告された。

今回分析対象となった子どもの多くに虐待歴や発達の問題が認められた。そのため、現在の解離性の問題についてのチェックリストのもつ予測性の検討は、今回分析対象となった子ども中でのものであり、一般的な子どもとの対比における予測とは異なっているだろう。さらにこれが、平均的な児童養護の状況を反映しているかどうかについても、今後更なる検討を行う必要があるだろうが、本研究の目的に照らせば一定の意味のある解析が可能となったと思われる。

児童養護の文脈で支援対象となる子ども

に多くの場合トラウマ、アタッチメント、発達の問題があるとすると、平均的な子どもとの対比で早期解離性の指標を考えるよりも、類似した問題性の特徴の中から、如何にして、後の解離性の発達に特異的に結びついた特徴を特定するかが重要となるだろう。

(4)現在の解離性の問題を予測する特徴

チェックリストの回答のパタンから、いくつかの項目群に纏めて検討を行った。複数の方法を採用して検討したが、ここでは因子分析による結果を報告する。

因子分析（最尤法、プロマックス回転）により、以下の3因子が抽出された：

リフレクティブ機能の未発達（情動の統合不全を含む）

情動調整不全（実行機能不全を含む）

自律神経系の過覚醒（睡眠障害）

これらの因子得点を独立変数に、CDC（子ども版解離評価表）得点への重回帰分析を行った結果、「感情を沈められない」「我慢できない」などの情動調整不全が正の（ $\beta=.589$, $p<.001$ ）、睡眠障害が負の（ $\beta=-.496$, $p=.006$ ）予測因であることが示された（ $R^2=.267$ ）。現在の解離性の問題の深刻さについての判定を目的変数とした解析でも同様の結果が示された。

更に詳細に検討すると、リフレクティブ機能の不全の中でも「気づいていない感情」「両価性の感情の同時表出」「突然感情が切り替わる」などの情動統合不全や「極端な空想への没入」など、解離類似の特性が重要な予測因であることが示唆された。また、睡眠障害の中でも、入眠困難については逆に、正の予測因である可能性も示唆された。

この成果は、児童養護の文脈において後の病的な解離の発達のリスクを持つ子どもに対して、予防的な介入支援を行う上で活用することが期待される。なお、今回の結果は、施設毎に職員の現状での、子どもの心理行動メカニズムの理解の制約のなかで得られたものであり、施設毎にその変動が大きいことから、一定の限界をもつものであることは留意する必要があるだろう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 8 件)

Tanabe, H. The effects of childhood trauma, dissociation, fantasy proneness, and negative emotionality in the prediction of frequency and

distress of nightmare. The 31st International Congress of Psychology, 29 July 2016, Yokohama Japan

Tokuyama, M., Tanabe, H. Comprehensive sex education program promoting independence of children in residential care home: Support to prevent abuse at institutions and resolve sex-related issues. The 31st International Congress of Psychology, 26 July 2016, Yokohama Japan

Tanabe, H., Tokuyama, M., Iwasaki, K., & Matayoshi, Y. Development of an early dissociative features checklist to estimate later dissociative problems for preventive intervention in the context of protective care of children. The 5th biannual conference of the European Society for Trauma and Dissociation, 14-16 April 2016, Amsterdam The Netherlands

Tanabe, H., Tokuyama, M., Ueno, N., Gotow, K. Reflective function and attachment as a key for later development of pathological dissociation from their adverse childhood environment. The 32nd annual conference of the International Society for the Study of Trauma and Dissociation, 18 April 2015, Orlando San Francisco, CA

Tokuyama, M., Tanabe, H. A case study of an intervention focusing on attachment disturbances between a foster mother and a foster child with attachment disturbances. The 20th International Congress on Child Abuse and Neglect, 14-17 September 2014, Nagoya Japan

徳山美知代・田辺肇・上野永子・後藤和文 リフレクティブ機能と安定したアタッチメントによる不適切な養育環境が解離に与える影響の緩和、日本心理学会第78回大会、2014年9月10日-12日、同志社大学今出川キャンパス 京都市

Tokuyama, M., Tanabe, H. A case study for foster mother and foster child with attachment issues. The 4th biannual conference of the European Society for Trauma and Dissociation, 27-29 March 2014, Copenhagen Denmark

Tokuyama, M., Tanabe, H. A case study of programs for foster mother and foster child with issues related to attachment. The World Association of Infant Mental Health (WAIMH) 14th World congress, 14-18 June 2014, Edinburgh Scotland UK

〔図書〕(計 0 件)

6 . 研究組織

(1)研究代表者

田辺 肇 (TANABE, Hajime)
静岡大学・人文社会科学部・教授
研究者番号：6 0 3 0 2 3 6 1

(2)研究分担者

徳山 美知代 (TOKUYAMA, Michiyo)
静岡福祉大学・社会福祉学部・教授
研究者番号：7 0 5 3 7 6 0 4